

松 山 大 学 論 集
第 33 卷 第 2 号 抜 刷
2 0 2 1 年 6 月 発 行

評伝 入江獎先生の人と学問（その7）

—— ある経済学史研究者の真摯な人生 ——

川 東 曄 弘

評伝 入江奨先生の人と学問（その 7）

—— ある経済学史研究者の真摯な人生 ——

川 東 埤 弘

目 次

はじめに

第一章 生誕から松山商科大学就任まで

（1923 年 6 月～1951 年 3 月）

第二章 松山商科大学教員時代

第 1 節 松山商科大学一教員時代

（1951 年 3 月～1973 年 3 月）

1) 1951（昭和 26）年度

～

3) 1953（昭和 28）年度 （以上、その 1、第 32 巻第 2 号）

4) 1954（昭和 29）年度

～

13) 1963（昭和 38）年度 （以上、その 2、第 32 巻第 3 号）

～

22) 1972（昭和 47）年度 （以上、その 3、第 32 巻第 4 号）

第 2 節 経済学部部長・大学院経済学研究科長時代

（1973 年 4 月～1984 年 3 月）

1) 1973（昭和 48）年度

2) 1974（昭和 49）年度 （以上、その 4、第 32 巻第 5 号）

3) 1975（昭和 50）年度

～

7) 1979（昭和 54）年度 （以上、その 5、第 32 巻第 6 号）

8) 1980（昭和 55）年度

9) 1981（昭和 56）年度

10) 1982（昭和 57）年度

11) 1983（昭和 58）年度

第 3 節 再び教授に戻って（1984 年 4 月～1989 年 3 月）

- 1) 1984(昭和59)年度
- 2) 1985(昭和60)年度
- 3) 1986(昭和61)年度
- 4) 1987(昭和62)年度
- 5) 1988(昭和63)年度 (以上, その6, 第33巻第1号)

第4節 再雇用期の入江先生(1989年4月～1994年3月)

- 1) 教育面
- 2) 研究面
- 3) 最終講義

第三章 退職後の入江先生

おわりに

第4節 再雇用期の入江先生(1989年4月～1994年3月)

入江先生は、1989年3月31日に、65歳により定年退職し、同年4月から5年間再雇用教授となった。

入江先生が再雇用になった年度から、たまたまであるが、校名が変更され、松山大学となった(1989年4月1日～)。

入江先生再雇用期の学長は、神森智(1989年1月1日～1991年12月31日)・宮崎満(1992年1月1日～1997年12月31日)であった。また、経済学部長は、村上克美(1989年4月1日～1993年3月31日)・岩林彪(1993年4月1日～1995年3月31日)であり、大学院経済学研究科長は伊達功(1984年4月1日～1990年3月31日)・田辺勝也(1990年4月1日～1994年3月31日)であった。

本学では、再雇用教授は役職から免除され、理事や学部長等の義務から解放され、専ら教育と研究に余生を捧げることになるが、入江先生は、役職に就かなかったものの、ゼミ連の顧問と軟式庭球部の部長はなお続けた。ゼミ連顧問は1991年度まで続け(1992年4月からは清野良栄に交代)、また、軟式庭球部の部長は退職の1993年3月まで続けた(1994年4月から穴戸邦彦に交代)。いかに、先生がゼミ連とテニスに愛情を示していたのかが分かるであろう。

以下、この5年間の再雇用期の入江先生の教育と研究活動についてまとめて述べよう。

1) 教育面

再雇用期間中に入江先生の担当科目は、いずれもマルクス経済学入門（4単位）、一般演習（2単位）、基礎演習（4単位）、経済学史（4単位）、ゼミ1、2（各4単位）、短大の経済学Ⅰ（2単位）。そして、大学院は経済学史であった。

マルクス経済学入門の講義内容は、例年とほぼ同様であり、1989、1990、1991年度は教科書として金子ハルオの『経済学（上）』を使用し、1992、1993年度は入江奨『マルクス経済学入門』（自販）を使っている。

基礎演習のテキストは、1989、1990年度は森岡孝二他編『入門現代の経済社会－日本と世界の明日はどうなる』（昭和堂）、1991、1992年度は宮崎義一『世界経済をどうみるか』（岩波新書）、1993年度は日本経済新聞社編『ゼミナール日本経済入門』などを使用した。

経済学史の講義内容は、例年とほぼ同様で、1989、1990、1991年度は入江奨『昭和61年度経済学史ノート』（自販）を使用し、1992、1993年度は入江奨『経済学史メモ』（自販）を使用した¹⁾。

ゼミについて、各年次ごとに簡単にみてみよう。

1989年度のゼミ1は、重野、篠原、田中、西脇、日高、松田、松村、山本、和田らが入り、ゼミ1のテキストはガルブレイスの『豊かな社会』であり、ゼミ2のテキストはリカードウの『経済学および課税の原理』（岩波文庫）であった²⁾。そして、5月の経済学部第2回学内ゼミナール大会では、入江ゼミ（4年生）は「リカードウ利潤論」を発表した³⁾。

1990年度のゼミ1は、奥村、島田、高田、濱部、藤岡、増元、水野、村上、

1) 以上、各年次の『講義案内』より。

2) 『1989年講義案内』

3) 松山大学経済学部のホームページより。

山川、山田、山本らが入り、ゼミ1のテキストはシュンペーターの『経済発展の理論』であり、ゼミ2のテキストは引き続き、ガルブレイスの『経済学と公共目的』を読んでいる⁴⁾。そして、5月の経済学部第3回学内ゼミナール大会では、入江ゼミ(4年生)は「大衆的貧困の本質」を発表した⁵⁾。

1991年度のゼミ1は、大月、大野、岡野、岡本、菊池、小松、近藤、高木、武田、谷本、寺川、徳本、藤井、目黒らが入り、ゼミ1のテキストはリカードウの『経済学および課税の原理』(岩波文庫、羽鳥・吉澤訳)であり、ゼミ2のテキストはシュンペーターの『資本主義・社会主義・民主主義』および『経済発展の理論』を読んでいる⁶⁾。そして、5月11日の経済学部第4回学内ゼミナール大会では、入江ゼミ(4年)は「シュンペーターの社会主義論」を発表した⁷⁾。

1992年度のゼミ1は、井沢、岩本、宇都宮、尾崎、北内、栗林、佐伯、高橋、中室、藤原、三浦らが入り、ゼミ1のテキストはスミスの『国富論』(大河内一男監訳)であり、ゼミ2のテキストは前年度の続きでリカードウの『経済学および課税の原理』を読んでいる⁸⁾。そして、5月14日の第5回学内ゼミナール大会では、入江ゼミ(4年生)は「リカードウ地代論の研究」を報告している⁹⁾。

1993年度、退職の年であり、ゼミ2のテキストは『エコノミスト』臨時増刊号(平成4年8月)で、その後、卒論指導をしている¹⁰⁾。そして、5月14日の第6回学内ゼミナール大会では、入江ゼミ(4年生)は「米自由化と地域経済」を発表している¹¹⁾。

4) 『1990年講義案内』

5) 経済学部のホームページより。

6) 『1991年講義案内』

7) 『学内報』第173号、1991年5月号。『学内報』第174号、1991年6月号。

8) 『1992年講義案内』

9) 『学内報』第186号、1992年6月号。

10) 『1993年講義案内』

11) 『学内報』第198号、1993年6月号。

大学院の方について述べると、1992年4月谷村智輝（徳島大学総合科学部卒業）が修士課程に入り、入江先生を指導教授とした。そして、谷村が入江先生、最後の大学院生となり、1994年3月、修士課程を修了した。谷村智輝の修士論文テーマは「利潤率の傾向的下落の法則に関する一考察－『資本論』第三部第3編第15章の内容的脈絡－」であった。そして、谷村はその後同志社大学博士課程に進学し、同志社大学教授になる。指導を受けた谷村は、後、入江先生への思い出として「研究に対する先生の緻密で誠実な姿勢を間近で拝見し、研究者とはかくあるものかと驚き圧倒されたことが強く思い出されます」と述べている¹²⁾

2) 研究面

次に、再雇用期間中の入江先生の研究面について見てみよう。

1989年6月、入江先生は、第64回経済学史研究会において、「古典派労働体系論の基礎」について報告している。それはスミスの労働価値論を労働体系論として把握せんとする主張であった。

入江先生は1990年3月20日、『つくし』第15号に、自己のスミス研究の仕上げをせんと述べている。

「少年老いやすく学成りがたしを地で歩んでいるのが私です。昭和二十七年六月一日に第一歩をふみ出した私のスミス研究。その意義がどこにあるか、さだかではありませんが、自我の主張の凝結をかえりみて、その後の何十何百という同一領域の業績があるにもかかわらず何がしかのレーゾン・デ・エートルがあるように考え、積み残しを補い、再編成して卑見を世に問い直す作業をしています」¹³⁾

12) 谷村智輝「弔意」『つくし』第29号、2006年1月、36頁。

13) 「つくし復刊によせて」『つくし』第15号、1990年3月20日、1頁。

1990年12月、入江先生は、『現代社会の諸問題と提言－大学新制40周年記念論文集－』に「アダム・スミスの、『労働価格』の形態論」を発表した（脱稿は1990年4月25日）。この論文において、入江先生はスミスの真実価格論について発表した諸論文が学会において「黙殺」されていることに異議申し立てをしつつ、最後のまとめのなかで次のように述べている。

「本稿の主要な課題の一つは、通説批判と異説の提起である。そしてその2つめは、スミスに内在しスミスを内側から読み取るための小諸論のこのされた課題に、正面から取り組むことであった。

私が提示しようとしたスミス理解の核心は、スミスが、貨幣を含め、『通俗の意味で』商品性格を付与された『労働』を含めての、諸財の連関をとおして、諸特定商品の『労働価格』の体系をつかもうとしているという理解、その意味において、スミスのとらえた真実価格体系は『労働価格』体系であり、それは労働体系の基盤となるべきものであったという理解、そしてスミスにとっては、それは抽象的観念である『労働』による体系であるがために、必然的に、その形態を要請されるものであり、その『形態』にスミスは眼を向けていたという理解、非資料的には、『労働の時価』がその形態を組み立てる媒介項をとされたという理解、資料的には『理論的価値尺度である穀物』の時価が、その形態を組み立てる『近似的』媒介項とされたという理解であった」¹⁴⁾

また、12月、入江先生は『松山大学論集』第2巻第5号「伊達功教授記念号」に、「アダムスミスの『国富論』第1篇第6章の研究」を発表した。12月26日が最終締め切りで、その督促を受け、年末も研究室通いをして、やっと1991年1月16日に脱稿したという¹⁵⁾ この論文は、1959年4月、『松山商大論集』

14) 入江奨「アダム・スミスの、『労働価格』の形態論」『現代社会の諸問題と提言－大学新制40周年記念論文集－』

第10巻第1号に発表した「国富論における価値法則論－スミスの労働体系論の覚書－」の補足であり、また、入江先生の予定著書『アダム・スミスの労働体系論研究』の柱の一つとなるべき論文で、その目次は次の通りであった。

- 「Ⅰ．問題設定－従来の諸研究との関連
- Ⅱ．第6章からの引用
- Ⅲ．グラスゴウ版に拠る初版以降の変更箇所の検討
- Ⅳ．第6章の諸問題
- Ⅴ．おわりに－第6章の文脈」

そして、その結論は「第6章『価値構成部分論』は、価値決定の次元に属するものではなく、第5章が交換価値の基本構造論であったことに対応する、交換価値の立体構造論であり、先取りしていえば交換価値の量的構造論である第7章とともに、『諸商品の交換価値を規定する諸原理』を組み立てているものであった」¹⁵⁾と述べている。

1991年9月、入江先生は、第82回経済学史研究会（合宿）において「堀経夫先生とスミス、マルサス研究」を報告している。

1992年3月31日、入江先生は教員生活後1年となり、『つくし』第18号に「教員最後の年度を前にして」を掲載している。その大要は次のごとくである。

「満七〇歳の誕生日を控えて、それよりも教員生活最後の年度に突入する方が大きな比重を占めている。やるべきことと思っていたことが、極めて小さな部分しかやり遂げていない。

研究室には学校の費用で求めた手つかずの文献が約一五〇冊眠ってい

15) 入江獎「一九九一年新春の“つくし”」『つくし』第16号、1991年3月20日、1頁。

16) 入江獎「アダムスミスの『国富論』第1篇第6章の研究」『松山大学論集』第2巻第5号「伊達功教授記念号」。

る。読む時間はなく、ひとまずカード化して図書館に返却するほかない。

講義のテキストの補充の作業が山積している。しかし、全面的な書き直しの作業は出来そうにない。

論文について、書き残しの未刊論文が3本ある。どれもマルサス関係である。これらを完成させるためには『人口論』と『経済学原論』その他を読み直し、メモをとっていかねばならず、十二ヶ月では足りそうにない。退職後に集中してやっていこう。

これからの一年を有効に使うためには仕事を思い切って整理し、この一年でないと実現し得ないことを集中してやることにしよう。それは著作を双書の一環としてまとめることである。この著作は積年の課題にけりをつけるものでなければならない。

この積年の課題は古典学派の体系を統一の体系と見るのではなく、内的に矛盾の発生因を含んだものと見る視点、つまり、ある段階で一つのまとまりをもっていた学説体系が、歴史の展開のなかで、相対立する体系群を生み、そのなかから、更に高次の統一の理論体系に転化し、階級的な対立を反映して、反権力の体系と権力の体系に分化していく新しい近代が展開されるという観点は歴史を有意味にとらえるうえで追求する意味があるのではないか。通説では矛盾、混乱の体系と言われているスミスの体系を、古典学派の創始者スミスの『国富論』体系が、それ自体としては矛盾、混乱を含まない、一つのまとまりをもっていた学説体系だと見る観点でとらえなおす作業が、私の積年の課題である。

幸い、平成五年度中に刊行される研究双書の二三号に一二〇万円の出版助成が支給されることになった。出版会社も決まった。しかし、出版社の条件は四〇〇字詰め用紙六〇〇枚、二四万字に抑えることであった。当初の自分が必要と思っていた頁数の三分の一におさえなければならなくなった。扱う対象を抑えねばならず、歴史の側面、階級的側面、思想的側面は割愛する他なさそうだ¹⁷⁾

入江先生の松山大学研究双書第23号（1993年度中）の表題とその目次は次の通りであった。

A・スミスの「労働体系」論の研究

入江 奨

		所要頁数
はじめに－本書の視点と展開の順序	(12)	1 ページ
第1篇 「未分析の」商品論体系の設定		13 ヌ
第1章 市場論の労働体系的導入		13 ヌ
第1節 分業論視点の設定	(13)	13 ヌ
第2節 分業論と交換体系の「未分析的」結合	(10)	26 ヌ
第3節 分業＝労働体系の量的規定因（市場規模）論の導入	(10)	36 ヌ
第2章 「商業社会」認識の導入（貨幣存在の機能論的規定）	(10)	46 ヌ
第3章 「財貨の相対価値または交換価値」規定諸原理視点の設定	(10)	56 ヌ
第2篇 機能論的貨幣把握のもとでの交換体系の構造分析		66 ヌ
第4章 貨幣価格と労働価格－真実価格（労働価格）体系の基本構造論	(20)	66 ヌ
第5章 生産力的歴史認識にもとづく労働価格の立体的構造論	(20)	86 ヌ
第6章 労働価格の量的構造論－市場価格と自然価格－競争論的需給論	(20)	106 ヌ

17) 入江奨「教員最後の年度を前にして」『つくし』第18号，1993年3月31日，1頁。

第3篇 自然的労働価格の変動構造論	126	〃
第7章 自然的労賃の近代的労賃への転換論と近代的労賃の変動構造論	(10)	126 〃
第8章 利潤の変動構造論	(10)	136 〃
第9章 地代の変動構造論	(15)	146 〃
第10章 自然的労働価格変動過程における3階級の役割	(8)	161 〃
第4篇 自然的労働価格変動の基本的因子としての資本の蓄積構造論	169	〃
第11章 「資本論」の分析視角－社会の発展要因としての資本の蓄積	(10)	169 〃
第12章 「資本の分類」と再生産構造論	(15)	179 〃
第13章 労働価格論的貨幣機能論	(13)	194 〃
第14章 労働価格論的資本蓄積論	(15)	207 〃
第15章 貸付と蓄積	(10)	222 〃
第16章 資本の諸用途と蓄積の歩み	(10)	232 〃
おわりに－スミス労働体系論の経済学史における役割	(8)	242 〃
		(250)

3) 最終講義

1994年1月20日、16時より17時半まで、3月末で再雇用任期満了により退職される入江奨先生の最終講義が岩林彪経済学部長の下で計画され、宮崎学長の挨拶、岩林経済学部長の挨拶の後、入江先生が「労働価値論史に関するこだわり」と題し、884番教室で最終講義を行なった。以下その講演の記録を記しておこう¹⁸⁾

18) 松山大学入江ゼミナール つくし会『つくし』第19号、入江先生退職記念号、1994年7月31日。

司会者

時間がまいりましたので、ただ今から会合を行いたいと思います。本日はお寒い中、多数お集まり頂きましてどうも有りがとうございます。私は、本日の司会役をつとめます経済学部川東です。宜しくお願いします。

ただ今から、入江獎教授御退職を記念いたしまして、先生の最終講義を聞く会を挙行したいと思います。最終講義に先立ちまして、松山大学の宮崎学長より一言ご挨拶があります。宜しくお願いします。

宮崎学長ごあいさつ

ただ今紹介がありました宮崎でございます。本日は学外から沢山お見えになっておりますので、お初にお目にかかる方もあると思います。御覧の通り若輩でございますけれども宜しくお願いいたします。

司会者から今、一言と言うことでありましたけれども、私自身も経済学部の所属であって、先生とは、いささか色々縁があったり、お世話になったりしておりますので、ちょっとだけ喋らせて頂きたいと思っております。

本日は、皆さん方にはお寒い中、わざわざこのように多数この会のためにお越し頂きまして大変有りがとうございます。先生がご退職なされますのは三月末をもってと言うことでありますけれども、これから期末試験があり、入学試験があるという松山大学の学事日程の都合で、今日こういう時期に最終講義を聞くことになりました。

入江先生は、皆さんご承知の方もいらっしゃると思いますが、大正十二年六月のお生まれでありまして、奇しくも、この松山大学の七十年の歴史と、先生の人生の歩みとが丁度軌を一にするものであるということでもあります。先生が、めでたく再雇用期間の満了を迎えまして、満七十歳に、本年度をもって満七十歳になることをもってご退職されることになりました。

先生は、今後の手続きを経まして本年四月一日からは、松山大学名誉教授になられることになっております。名誉教授は現在ご存命の方、七名であります

ので八人目の名誉教授におなりになるという、もう一人名誉教授になられる方がいらっしやいますけれども、その方より先生の方がお年上であるということでもって、八人目と言わせて頂きます。

先生は恐らく、私の知る限りでは、今までの中で一番熱心な研究活動が続けられる名誉教授におなりになるだろうと思います。先生は、もうそのために準備怠りなくですね、名誉教授に関する、名誉教授に対する処遇の規定というふうなものを、私にもう何年も前から早く作りなさいというふうに指示されてですね、私もそれを受けて、そういうものを作っております。先生は、恐らくその処遇を、まあ大したものではありませんけれども、十分に活用されて、今後とも変わらぬ研究活動をお続けになるだろうというふうに私ども期待し、先生を見習いたいと思っているところであります。

ご講演に先立ちまして、先生のご功績ということについても若干触れさせて頂きたいと思います。まあ、ご功績等をご紹介するというのは、先生の功績を褒め讃えるという意味では光栄といえば光栄でありますけれども、恐れ多い先輩の業績をあげつらうということでもあります。その点では、大変気骨の折れる仕事でありますので、その気骨の折れる部分は、できれば後輩の、私から見ればこの学校においては後輩に当たります岩林学部長に潔く任すことに致しまして、ごく大綱みのところで話をさせて頂きたいと思います。

先生は、一口に申しまして本当に熱心な教育者であられたと思います。経済学史、経済学の入門の講義。マルクス経済学入門というふうに言っていた時期もあったと思いますけれども、そういう科目を中心に本当に熱心に学生を指導されました。

二番目に、先生は非常に綿密・緻密な研究者であられた。先生のご専攻とされる分野がそれを要請するという面もありましたけれども、そういうことを乗り越えて、先生の、大変、いわば事実と言いましょか文献と言いましょか、そういうものに忠実な研究態度は私どもが模範として見ていたところであります。

三番目に、先生は誠実な大変誠実な管理者であったというふうに言って良いと思います。

管理者という言葉は、必ずしも適当でないかも知れませんが、先生はいろんな学内の役職を経験されました。図書館長、経済学部長、大学院の経済学研究科長というふうなもの。それらが代表的なものであります。

大学院の研究科長にいたりましては、三期六年間という長きにわたって、その職をつとめられましたが、この六年間という長さは、先生は記録であります。恐らく、これからもうそういう方が出て来ないのではないかと思います。その職務にあられた間、先生はその責任者をつとめておられます。規定や制度について、非常に綿密な観点から見直され、あるいは組織の整備をされるというふうなことに積極的に、前向きに、ご自分で問題を発見するという姿勢で取り組まれましたことを私達横で見ておりまして、心から敬意を表しておったところであります。

ところで、先生はいろんなことをなさいましたけれども、一つだけ先生がなされなかったことがあります。先生のご経歴とか、そのご造詣を考えれば当然されたであろう、されるべきであったことで、されなかったことが一つだけあります。それは、学校法人の理事、ないしは理事長という役目の仕事であります。先生が、理事という仕事をやれというふうに勧められておる、そういう状況にある、そういうことを、私も一度ならず、そういう動きがあるということを知ったりも致しました。しかし、先生はこれにつきましては固くお断りになったということのようであります。

先生は、先生なりに一つのその事については、ここに書かれていることとは違った意味のこだわりがあつてですね。この評議員という仕事、評議員会の議長という仕事などで、間接的に学校法人の経営と関わる仕事はされましたけれども、直接、理事という形で経営者という形ですということについては、先生は一つのこだわりがあつて、そこまでは足を踏み入れられなかったのではないかというふうに思っております。しかしながら、その点先生は妙にこだわる

ことはしないという面も持っておられまして、先生自身は理事をされませんでしたけれども、先生の愛弟子で、今は亡き山口卓志さんをして、若くして理事会に送り込み、その才能を充分に発揮させるというふうなことをされた。つまり、入江先生ご自身の代役を弟子の山口さんにさせたという点では、ちゃんとこだわった部分の裏を取っている、というか、そういうことであります。そういう点では、先生はこれまで四十三年間、本学の教員の仕事をされてきた訳でありますけれども、そういう意味で、良い意味でのこだわりを持って来られた方だというふうには私は思っております。

本日のご講演、最終講義のテーマも「労働価値論史に関するこだわり」ということであるということを知りまして、私が今申し上げましたことと相通じるところがあるというふうに自分で自分を納得させているところであります。

ちょっと長くなりましたけれども、本日お越し頂きました皆さん方に心から敬意を表し、ご静聴をお願い致しまして私の挨拶とさせていただきます。どうも有りがとうございます。

司会者

では次に、今日の会合の主催者を代表しまして、経済学部長の岩林彪先生のご挨拶がございます。先生お願い致します。

岩林経済学部長ごあいさつ

ただいま、御紹介いただきました岩林でございます。早く先生の最終講義をお聞きになりたいと思いますけれども、一言、主催者を代表しましてごあいさつを申し上げます。

私達は今日非常に不透明な時代に生きております。松山大学は幸いにして七十年の歴史と、民主的創造的な学校運営の伝統をもっておりますので、この不透明な時代を手探りしながらではございますけれどもこれまでなんとか無事切り抜けてまいりました。考えてみますと大学七十年の歴史は、大正デモクラシ

一の洗礼を受けた松山高商の先生方や、戦後デモクラシーを率先垂範された松山商大の先生方によって担われその民主的創造的な内容を維持してまいりました。そしてその内容のすばらしさゆえに、私達はこれに安心してよりかかってこれたのでございます。ところがとても残念なことではありますが、戦後デモクラシーを率先垂範されてきた松山商大の先生方は入江先生を始めとして、今静かに教壇を去られようとしております。立派な歴史と伝統を受け継がせていただいておりますが、後に残された私達、少なくとも私は個人的には、今日のいわば転換期デモクラシーの輪郭と方向をいまだつかみきれておりませんので、私達の責任と使命の大きさに圧倒される次第であります。

入江先生の御経歴につきましては、ただいま宮崎学長から縷々御紹介がありましたので、私の方は先生の研究活動や教育活動についてふれさせていただきたいと思います。先生の研究活動につきましては、お手許の資料「入江獎教授略歴と研究業績」というこの資料をごらんいただければ一目瞭然ではございますが、先生の松山商科大学、松山大学一筋という御経歴と同じように、この研究活動の領域でも経済学史分野一筋という道を歩んでこられました。主にミス、リカードウ、マルサスらの理論を通じて、経済学の歴史におけるイギリスの古典派経済学の位置と役割の解明に取り組まれ、すぐれた業績をお上げになっておられます。経済学を少しでも学んだ者はだれしも経験があると思えますけれども、少なくとも私は経済学の中で経済学史の分野ほど難しい分野はないと感じてまいりました。どの分野でも多少なりともそうではあるんですが、特に経済学史の分野は理論、歴史、政策を総合した上で、さらに哲学、社会学、宗教学、人文科学、自然科学等々の知識をいくつかの言語とともに修めなければならないからであります。ですから私は常々経済学史の研究者に畏敬の念を抱いております。そしてこのようなわけですので、まことに残念ではございますが、といいますか実はまことに畏れ多いので、入江先生の研究業績を皆様方に適切に御紹介することはできないのであります。先生の今日の講義をお聞きになって皆様方御自身で先生の研究活動の内容と水準のすばらしさを感じとっ

ていただきたいと思います。

入江先生の教育活動につきましては、先生は、「経済学史」「経済原論」などの授業科目を担当されまして、その真摯で熱心な教育姿勢は常に周囲を刺激せずにはおかないものでありました。先生の教育へのたぎるような情熱を眼にして私達は自らのえりを何度も正さずにはおれないのであります。先生は特にゼミナールの指導に御尽力なさいました。学内、中四国、あるいは全国のゼミナール大会での入江ゼミの活躍ぶりは、今日の松山大学経済学部のゼミナール活動の礎となっております。今日はこの会場に、多くの入江ゼミ卒業生の方々が見えておられます。入江ゼミでは「つくし会」というゼミ卒業生の親睦の会を作っておられます。先日機会があつてこの「つくし会」の名簿を見せていただきました。一九五三年三月卒業のゼミ一期生から、今年三月卒業予定のゼミ第四二期生まで六六一名、これに大学院入江ゼミ修了生七名を加えますと、実に総計六六八名の学生諸君が入江先生の薫陶を受けたことになるわけでございます。名簿に記載されておりますお名前、勤務先、役職等を拝見させていただきますと、それはもう錚々たる顔ぶれでございます。教育者としてすばらしい業績をお上げになっていることは、この「つくし会」の存在そのものの中に如実に示されていると思います。私は「つくし会」が入江先生御自身にとってのみならず、私ども経済学部、ひいては松山大学そのものにとってもきわめて貴重な財産であると考えています。この機会に「つくし会」の一層の充実を祈念させていただきます。

東北大学学長西澤潤一さんが『人類は滅亡に向っている—二十一世紀への私の提案』という多少ショッキングな名前のついた著書の中で、今、時代は軍備の時代から経済の時代へ、そして今日、環境の時代へと移行しつつあるが、大学はこの時代の変化に対応できず危機的な状況にある。大学が危機的状況を切り抜けるには、大学が自らの学を構築して個性を確立することが必要だ。何故そうかという、学術研究と教育に対して今日要求されているものは従来と全く異なる次元のものなのだ。そして自らの学を構築するためには実証的学問の

方法をとるもどし、他人のやっていない独創的なことを研究しなければいけない。今、もっとも我々に必要とされるのは一つの目標だ。このように西澤さんは言うておられます。これを経済学に引寄せて考えてみますと、世界でもっとも格調が高いといわれます、イギリスの経済紙『エコノミック・ジャーナル』が昨年創刊 100 周年を記念して編集した『The Future of Economics』という書物の中で、当代一流の経済学者達が経済学について、次のように発言していることと符合いたします。彼らは、そこで経済学について次のように言うております。「経済学は経済問題を解決するための処方箋を書くことを使命としているにもかかわらず、経済問題と乖離した経済学が増えている。経済学の分析方法は新古典派の合理的行動理論と一般均衡理論の数学的展開という点でいちじるしく進化したが、これだけが経済学の方法論であると思ひ込む人が多く、それは経済学の使命から見て、明らかに一つの袋小路に入ったことを意味する。経済学が自らを現実の経済問題を解決するために役立つ科学として再生するためには、経済史や現実の経済の観測からえられる事実に立ちもどり、社会科学、認知科学、実験科学、統計データの収集と処理などのあらゆる方法論と相互に力を貸し合いながら、新たな経済学へのパラダイム・シフトをとげる必要がある」。このように世界の一流の経済学者達は述べております。私はいずれの主張も正しいと考えております。そしてまさにこのコンテクストの中で私達は、今日の入江先生のお話を聞く機会に恵まれました。先生は先日、ジェヴォンズの話をしようかと思っているのだがというふうにおっしゃっておられましたので、本日の講義のテーマであります「労働価値論史に関するこだわり」とジェヴォンズとが一体どういう関係にあるのか多少怪訝に私は思っていたのでありますが、今日レジュメの後の方についております先生の論文、コピーになっておりますが、「ジェヴォンズと労働体系－労働価値論史覚書」という論文でございます。これを私は先日読ませていただきましてそこで納得いたしました。その内容はまさにただいま御紹介しました時代のコンテクストあるいは学問のコンテクストに沿っているのでございます。

先生は昨日、ごくかみくだいて話すつもりだとおっしゃっておられました。日頃先生のお話を伺っているものとして是非そのようにお話ししていただきますよう、また拝見いたしますとかなり大部のレジユメが用意されておりますので、この後六時から引き続き“感謝の夕”が開かれますことを御承知おきの上でまことに恐れいりますがお話し下さいますようお願い申し上げます。私の開会のごあいさつとさせていただきます。どうも有りがとうございました。

司会者

どうも有りがとうございました。それでは最後になりますが、入江先生の最終講義を受けたいと思います。テーマは、今も御紹介がありましたように「労働価値論史に関するこだわり」で、ジェヴォンズを中心にしてお話し頂けるのではないかというふうに拝察しております。では入江先生宜しくお願い致します。

入江先生最終講義 「労働価値論史に関するこだわり」

大変お忙しい中、遠い処から、東京とか、広島とか、もう各地から卒業生の諸君が集まって下さいまして、私のつたない話に耳を傾けて下さるというのは何と有りがたいことであろうかと、こういう感謝の気持ちで一杯でございます。

実は、ついさっきが最終講義の瞬間となった訳ですが、数日前から多少ノイローゼ気味でございまして、最終講義というのが頭について「これせにゃいかんのだが、どないにしょうか」と……年賀状を今年は歳を取ったせいということで勝手させて頂きまして、返事のスタイルでだけ出すということで、多少余ったものがございましたが、裏に何も印刷をしていない年賀状を四、五十枚、丁度大田君がラベルを作って頂いておりますので、それを貼りつけて、さて貼り付けたまではいいんですが、裏は白紙でございまして、何か書かにゃいかん。何書こうかな、で、まず寒中お見舞い申し上げます。そこま

ではいいんですが、そっから先がなかなか出ないんで、いま私は……ということで、最終講義の話をして、これで頭を悩ませている。で、何でどういう訳で頭を悩ましているかって言いますと、「公開」ということなんです。公開の最終講義だ、これ厄介なことになったなあと、これが頭の中の痛いところでございます。

実は、岩林経済学部長からお話がございまして、「先生、テーマは何ですか」ということで、「そうだな、『労働価値論史に関するこだわり』くらいにしようかな」と、何とはなしにそう言ったんです。で、その時に、僕の頭の中にありましたのは、お話を申し上げる人達の数はいざい十五名か二十名ぐらいだろうだったんです。しかもかなりハイレベルの人達で、少々難しいことを言っても充分消化できる、そういう人達で、何故そういうふうにしたかといいますと、羽鳥卓也という方が定年になられた後に論文を贈って下さいまして、そこで最終講義を論文にしたもので、これは関東学院の最終講義での話だったようでございますが、「マルサスの穀物法に関する研究」という大変キメの細かな議論であります。

あゝいうスタイルの最終講義だったらしてみたいなあ、そういう思いを持っておりましたので。ところが公開となるとそうはいかと、どんな人がおいでになるだろうか、何を喋ったらいいのだろうか、まあ頭に掛かって仕様がなかった訳です。で、実はこれ（レジュメをとって）出来ましたのは、打ち明けて言いますと昨夜の今朝の三時でございます。三時までぐずぐずしとったと、こういうことでございます。

で、もう止むを得ませんので、あの「ジェヴォンズの労働体系」これ一番最初から頭にあったものでございますが、これに書き添える積もりだったんですが、つまり、これに付け加えてお話し申し上げる積もりだったんですが、もうここまで来たら仕様がな、と。これをコピーしてこれを材料にしてお話ししようかということなんですが、字が小さいいものですから、抜き刷りはですね、一寸分らないんですが、一枚目のところに書いておりますように、「松山商科

大学創立四十周年記念論文集」っていうのがありましてね、そこに出した昭和三十八年十一月の日付のある論文なんですね。

これ、昭和三十八年といいますと一九六三年で今から三十年前ですね。で、三十年前っていうと、もういい加減オギャーと生まれた人が大学を卒業し、いい大人になる時期でございます。そんな古臭いものをよう取り出したなあと、まあ皆さん方思われるかも知れませんが、私、経済学史をやっておりますんで、年が経つのが、月日が経つのが遅い、ということなんでしょうね。で、三十年前と言いましてもつい昨日のような感じがしている訳です。で、これを材料にお話ししようかと。しかし、色々考えまして、この中味、私、三十年前の抜き刷りをですね、読み返してみまして、書いた本人がこれは分りにくいなあという感じでございますんで、まあ初めてお読みになる方、お分かり易い筈がないですね。それだったら、今日は居眠りの会合になってしまうと。どないにしたらよかろう、ということで、つらつら考えまして、私の学生時代、私の広島時代、私の松山商科大学時代、まあこういうスタイルで話を進めたらどうだろうかという、これは思い付きでございます。ここを書きましたのは昨日の十一時頃でございます。

で、まあ学生時代から始めます。つまり私の今日あるのは学生時代があるからでございますが、私の学生時代っていうのは、あの、中学校、その前の小学校で一番強く残って居りました思い出は、あの映画、小学校と言いましても同級生が四十二、三人と小さな学校でございます。で、男女共学でございますね、まあ、私の隣に昔座とった人が、こないだ会ってみしたら随分におばあちゃんになっておって、ああ彼女が初恋の人かって思ってますね、感慨うたたなものがございましたが、その頃に特に強く印象に残ったのは ABCD っていう言葉なんですね。その言葉をこの間、ゼミ一部生、二部生か、卒業論文を書く連中だったと思いますが、彼らの口から ABCD という言葉がでまして、お前その意味よう知つとるんか？ という話にもなった訳ですが……まあ多くの方はご存知と思いますが、A はアメリカ、B はイギリス、そういうことで、

日本が包囲網にあっているっていう訳ですね。で、石油が方々から止められている、これが映画で流されまして、小学校の私は、日本は大変なんだなあ、何とかせないかなあと……そういう幼な心に植え付けるような政策を流していた訳ですよ。で、これが今もってあるということですよ。勿論小学校の三、四年生、十歳か十一歳の時ですから、前が見える訳じゃございません。ところが、中学校に入りましてね、偶然私の受験した学校が受験した者を殆ど採ってくれる、つまり落ちる者が無いという学校でございまして助かったんですが、その学校に入りましたら、いきなり軍事訓練ですよ。皆さんご存知でしょうか、ゲートルというものがあるんです。中学校に行く時にゲートルを巻いて行くんですよ。そういう状況の中でありますから、軍国主義という言葉、そういう言葉で呼ばれなくとも、その内容が骨身に沁みてきている訳でございます。皆さんは、ご存知の方あるかどうか知りませんが、「見よ東海の……」という歌がある訳ですがね、ああいう言葉を愛唱していた時代でございます。で、中学校の五年生になりまして、四年からも受けられたんですが、五年で何とか受験せにゃいかんというので受けた訳ですが、家が貧しゅうございまして、私の家は没落農家でありまして、小学校に入る前はある程度広い畑がございまして、そこで桑を植えておりました。桑の実が沢山採れまして、桑の実を採って遊んでいた記憶がある訳です。ところが小学校に行く頃には、何時の間にかその田圃は無くなっているんですね。後で聞きましたら、お祖父さんが相場というものに手を出して大損して土地を手放してしもうたと、まあこういうことで、親父は安月給の銀行員でございまして、余り金のかかるような処へは行けんと……。まあ大学に行かして貰いたいなあと思い乍ら、その頃、一応事業に成功してる伯父さんが大阪に居た訳なんです。大阪に行ったら下宿さしてくれるから飯代はいらんなあ、ということで、大阪商科大学へ行ったわけです。

で、その前に受けた、つまり大阪商科大学と同時に受けたのが大阪医学専門学校、医専ですよ。それはなんかと言うと、軍医になるためなんですがね。

これは見事に落ちて、大阪商科大学の方へ入った訳です。大阪商大に入りまして、話を端折りますが、昭和十八年といいますと学徒動員のあった年なんです、ご存知の方もあるかも知れませんが、学徒動員、つまり大学生がもう大学に行くのは止めようという、今の落第生にとっては非常にいい制度かも知れませんが、成績が悪くても早う卒業せいという……。私達の卒業の年次は昭和十九年三月だったんですが、十八年の九月、確かそうだったと思いますが、私は予科に入っとった訳ですがね、もうお前は予科を修了させる、とこうなっているんですね。卒業を認めるんじゃないんです。修了せいと、こういう命令でございましてね、否応無しに、で学部の学生になれ、学部の学生になったら、まあ余り深刻には考えては居りませんので、角帽っていうのをかぶってみたいとは思っとったわけですが、しかし学部に入る時は徴兵検査を受けるわけですし、徴兵検査を受けて、私の身体は余りよいわけですから乙種合格と、こうなるんで、同じやったら甲種合格にしてくれたらええのになあと思わんことはなかったんですが、乙種合格で、要するに兵隊に行かないかんのじゃなあ。で、何時行かかって言うのと十二月一日なんですがね。そうすると残されているのは二か月しか無いわけなんですね。で二か月经ったら兵隊に入らにゃいかん。でどうしようかと。やっぱりためになる本を読まにゃいかなあ。で、ためになる本として選び出したのが、高田保馬の『貧乏必勝論』というのがあったんですがね。高田保馬って言う人の名前ご存知でしょうか。日本の昭和十年代の高文試験ですね、お役人になるための試験を受けるための必読の参考書だったわけです。で、高田保馬の『経済原論』なわけですが、これを書いた人ですが、その人が今でも思い出してゾッとしますが、貧乏必勝論と、つまり国民が貧乏になるっていうことであれば必ず勝てる、そういう変なことを言った議論であります、それを戦争に行く前に一生懸命読んだということですね。そうこうする内に、今、イギリスに行っている、名前をちょっと忘れましたが、エーと森嶋、あの人は戦争の時にマーシャルの経済原論を持って行ってですね、そこで一生懸命読んだって言うんですがね。私にはそういう知恵は無い訳

で、森嶋っていう人は偉い人やなあと、あの人は私が知った頃はもう数学の達人だったと、こういうわけです。安井琢磨の愛弟子でその話を一寸聞いたんですが、これは（戦争から）帰ってからのことでございましてね。まあ戦争中のことはいうても仕様がないますから省きますが…。

私が帰って来ましたが昭和二十一年の二月の終わりに鹿児島に帰り着いたわけです。ところが台湾という処はマラリアの多い処で、マラリアにやられておりまして、療養せにゃいかんという訳で、暫くは入院といいますか、寝た切りで医者に通って薬を飲んでおりましたが、そのうちに、若いんでしょね、身体が直りまして二十二年五月に大学はどないになっているんだろう、大学に帰らにゃいかんわけだし、まだ学生であるわけだからというんで、大学へ帰った、つまり復学手続きをした。

ところがその時びっくりしたのは予科の時代・学部時代の、私が多少愛着を覚えておりました学部のキャンパスの中に、図書館があったんですが、ご存知の方があっても知れませんが、大阪商科大学の図書館にはいい蔵書が沢山あって、福田文庫などがその最たるもので、非常に静かな、こうした処で勉強したらええなあということで、私も機会を捉えてはそこへ入っていたんですが、それが進駐軍のダンスホールになるっていうんで、中にあった本は全部ひっくり返されてしまって、道仁小学校の教室に積み上げられているのです。五月に復員して、忽ち読む本が要るので図書館に本を貸してくれと言うたら、本だったらそこに仰山あるから適当に探さない、持って帰ったらいかん、ちゃんと借用の手続きをして借りて行きなさい。まあこういうことですよ。

で、同時にゼミというものがあって、学部ですからゼミを決めにゃならん。で、その頃の大阪商大の授業というのは圧倒的にマルクス経済学が多かったですね。どっちを向いてもマルクス経済学で、悪口言うのはですね、あの先生はゴルクスだからなあ。ゴルクスと言うのはゴツトルとマルクスを一緒にしとるわけですがね。こういった人もいたわけですが、そういうような人の処に、私の友達は沢山懂れて飛び込んで行くわけですよ。僕はそんないややなあ

と、つまりあまり人が見向きもせんような処へ入ろうと思ひまして、言うたら悪いんですけど、そういうことで入りましたのが一谷藤一郎という先生の処なんです。

一谷先生は金融統制の理論を書かれて博士になられた人なのですが、あれが博士論文じゃそうなという分厚い本、よう書いたもんじゃのう、とその時は感心して居りましたが、兎も角そこへ入りまして、先生と色々話し乍ら勉強したわけですが、当時その一谷ゼミにはかなり自由な雰囲気があったんでしょうね。いきなり自由論題で報告しなさいって言われまして、「自由論文で報告せえって、好きなテーマで勉強して報告したらいいんだな」。で、「じゃ何にしようかな、図書館へ行かにゃいかん」。で、図書館の本の中に入りまして探して居りましたら、見つかったのが山田盛太郎の『再生産過程表式分析序論』、これが出て来たわけなんですけどね。これ面白そうな本だなあと、そういう感じがしまして、借り出して一生懸命読みまして、十日くらい読んだでしょうか、ノートを採って、そして再生産過程表式序説がよう自分のものになっとる。自家薬籠中のものになっとると、そういう顔をして一谷ゼミで報告したことを覚えています。これが私の研究の最初でございまして、何も山田盛太郎さんが講座派の闘士だったというのを知って選んだんじゃないんです。そうじゃなくて偶々そこにそれがあった、ということなんですけど、しかし、その中で初めて再生産表式っていうものを知りましたし、マルクスの再生産表式ということを知りましたし、いろんな人の、ツガン・バラノフスキーという人の名前も出てきますし、不思議にレーニンが出て来なかったんですけどね。レーニンの『市場の理論』という本がありますが、これ出て来なかったんですが、それを勉強しておりました。

ところが、その内に自由論題の報告が一巡しまして、共通テーマで勉強しよう、共通のテキストを決めようということになりまして、何がいいか、先生がいろいろ候補を出して下さるわけですよ。その中にケインズの一般理論というのがあるんだがどうだろうか、こういうことでございます。何故ピグーの方

を挙げないのかと思いながら。ピグーという人の名前もチラッと頭に入っておりまして、何故ケインズだろうかと疑問に思い乍ら、先生がそう言われるんだから勉強せにゃいかなんというこで、ところが本屋に行ってもそれないわけですよ。で、止むを得ませんので、大学ノートを買って来まして、図書館で借り出しまして、全部写しました。大学ノート何冊あったでしょうか。全部筆写でございます。最近のようにコピー機があるわけじゃございませんし、コツコツ自分のペンで書かにゃいかなのですからね、それはしんどかったです。

だけどそれで勉強したんです。その時は不思議にヒックスの“THEORY OF WAGES”という本がありますが、これも筆記した記憶があります。そういうことで、ケインズの一般理論、一番最初に買った原書がGENERAL THEORYなんです。

やっぱり原書くらい持っとかないかなあ。こういうことで、友達に言って、何処か本無いかと言いましたら、京都に売つとるぞってなことで、そな買いに行こうと京都に行きましたら、金出したって本はあげやせん。代わりを持って来にゃいかな。で、止むを得ませんのでかなり大きいボストンバッグの中に、例えば、私、一番愛着を覚えとったのが和辻哲郎の『風土』、ご存知の方あるでしょうか、これなんか、一生懸命書き入れしてですね、愛着を覚えとったわけです。西田幾太郎の『善の研究』とかですね。そういうものが好きで、一生懸命……これは予科の時代ですね。同時にカントを勉強したり、ヘーゲルは無かったんです。どういうわけでしょうか、ヘーゲルがなくてカントを読んだり、リッケルトを読んで、これが学部時代でございまして、それを全部持っていかんと「一般理論」くれんのですよね。洋書をね。だから止むを得ませんので、書き入れがあった、離したくないなあと思う、それを全部手放して私が初めて手に入れたのがGENERAL THEORYでございます。

で、これを一生懸命勉強して……ああ時間が無くなったようですね。えゝ、勉強しとったわけですが、ところが友達の中にコンピュータの研究しとる男で

すが、お前ケインズをそんなにやっても面白くないぞ、もう一寸面白いやつがあるんだと、J. R. HICKS という人を知らんかと言うわけですがね。で、ヒックスの“VALUE AND CAPITAL”という本があるんだ。これを一緒に研究しようやという話になりまして、で、誰も研究している者は周囲にいないわけです。その男と研究しただけですからね。一谷先生に「先生、ヒックスの本持ってますか」「いやわしんとこにはない」「読んでますか」「読んでない」「そうですか、まあ私がそのうちに翻訳しますから」言うてですね。

卒業論文を書かなければ。その頃、私は試験を二か月に一回受けていました。受けないと卒業出来ないんですよ。私が大学にいたのは、何処かに記録があるかも知れませんが二十一年五月初めに帰って、二十二年の九月に卒業ですから、大学に在籍したのは十七か月くらいなんです。その間に、卒業資格取らにゃいかんでしょう。だから二か月に一遍くらい、あの頃便利良かったんで、先生が黒板に何々科目試験問題何々と出してくれるんです。試験問題は分かるんですから勉強したらいいわけです。会計学の試験の時なんかは、木村和三四郎という人、これは多少授業には出ておったんですが、よう怠ける先生で、欠席の方が多いんですよ。最近は余りそういう先生はいなくなったと思うんですけど、出席簿がキツイ訳ですから真面目に出てると思うんですが、昔はよう休みよった先生がおられまして、木村和三四郎という先生はその一人です。その人の簿記の試験を受けにゃいかん。で、何か参考書ないか、木村さん書いとる本ないかなあって、それを探して来まして、図書館に入って山の中から引っ張り出してですね、それをまあ二、三日かけて、言うたら丸暗記で、何処が一番和さん〔注、木村和三四郎のこと〕のツボだろうかなと言うことで、ツボを心得て答案を書いた。結構単位、あれでも貰えたんですから不思議ですが、今すっかり覚えて居りません。もう終わった瞬間に無くなっておりますが。

まあそういう状態ですから、勉強っていうのはゼミの時間なんですよ。そのゼミを通して私は学生の頃に北野熊喜男という人にも直に会っております。というのは関西の大学の教員が集まって研究会があるんです。何処何処で

誰々の研究会があるらしい、行こうやっていう話です。で、学友とついて行きましたってやりましたが、その中で先生が喋っとるんだからええことだろうと思って聞いてったんですけど。まあ今考えると変なことが多かったですね。「君、ソビエトっていうのは何んせ農業を鋤でやらのだからなあ」と、まあソビエトの農業と日本の農業太刀打ち出きるもんかってな話をやっとなんて言ってるからね。本当かいなと思いつつ、現在は違いますよね。現在の日本の農業ってのは機械化がもの凄く進んでおりますが。

まあ、そのうちに無理やり卒業です。で、私の扱ったのは一谷先生との約束通り、ヒックスの“VALUE AND CAPITAL”の翻訳でございます。あれはフランス語が出てるんでしてね。私フランス語取ってないんで、「一谷先生にフランス語の訳教えて下さい。これ訳さんと卒業論文書けませんから」っていうんで、一日朝から晩まで一谷先生の処へ押し掛けて教えて貰ったのを記憶しております。

まあそういう訳でございますから、私がいま申し上げているのは、あの入江は、生まれてすぐマルクスという言葉が口から出た男じゃなかったという、そういうことを言おうとしているんです。

マルクスという言葉はズーとあとになってやっと出ただけです。これでいいますと（配布資料）、一枚目の左にざっと書いています。これ端折らんと時間がなくなりますんで、あれですが、この中でですね、勿論学生時代はどの時間出ても資本論の引用ですからね。だから、資本論一冊あったらどの科目でも単位が取れるっていう、そういう状態でございますから、多少頭に入ってるんですが。しかしあまりいい方じゃないんですよ。本気で血肉になるような形で勉強しませんから。で、本当に資本論について勉強したのは私の広島時代という処で書いております。建林正喜先生の私塾生、私、全くの私塾生でございます。奥さんには随分迷惑かけました。で、私が広島時代に、建林先生、広大の工学部に居られた先生なんです、広島に政経学部を作るにあたって、色々尽力頂きました先生です。その後、立命館大学に帰って、岐阜経済大学の学長

をなさったりして、今は引退しておられますが、その建林先生、どういうわけか、気が合ったんですが、そこに丁度晩飯済んだ頃に行くんです。そうすると、建林先生が焼酎呑めってなことで、奥さんが焼酎を出して下さいまして、それを呑みながら必死で考えるわけですね。どういう議論を吹っかけてやろうか、今日はマルクスでいこうか、ヒックスでいこうか、ケインズでいこうかってな調子ですからね。まあ議論を二時間ほど致しましてさっさと帰って来るといふ、それがズーっと続いておりました。

その頃に、マルクスの勉強を一生懸命やったことはあります。マルクスが出だしたのはその頃からですけども、ところがその建林先生はマルクスの『資本論』をハンドライティングで写していってらっしゃったんです。やっぱり筆写が一番いいようです。で、出てきた問題について「わしゃ此処おかしい、おかしいと思わんかな。お前どう思うか」って。「そりゃ先生、こうでしょうが」ってなことで、あれこれ議論していた時代でございます。その頃読んでいたのがヒックスとかケインズとかマルクスとか。マルクスでも THEORIEN の方は余りやってなくて、DAS KAPITAL だけでございます。が、この先生の恩義によってですね、私現在の松山商科大学からその後の生活が始まったということでございます。

昭和二十六年一月五日が私の結婚式です。その前、昭和二十五年、時は朝鮮動乱という時に、恋だけは盛んに咲いたことだと思ひまして、とうとう彼女と結婚する羽目になった訳ですが……。

その前に、私は当時広島の政経学部の助手だったですね。月給はこれだけで、まあ二人で生活したら、下宿代は幾ら幾らで、生活出来ると思っていたら早速金が足らんですよ。私、幸いに女房が貧乏生活に強い女でございまして、金が無くなる前に何を買ったかと言いますと、味噌と米を買った。まあ金が無くなったが、味噌と米があるから大丈夫だと、こういうことですね。結構飯だけは喰わして貰いますが、しかし何時まで経ってもこれでは亭主の沽券に関わるという、「何かええ道ないでしょうか。建林先生どうしょうか」「ならええ道生

話してやろう」ってなことで、丁度その頃先生は松山商科大学に兼任教授で来ていらっしやいまして、担当が数理経済学とか経済原論とかなんです。「わしはこういうことやとるんで、松山商科大学へ行け」と、「松山商科大学っていうのあるんですか」、まあ松山という処を知らなかったんですから、「あるんですか」って。「それはあるさ。わし行とるんだから」ということで（笑い）、「まあそこに世話して下さい。兎に角明日の飯を喰わさにゃいかんので」と。その時、教務関係の部長が太田明二先生で、建林先生とお友達なんで、「先生何とかしてくれますか」。で、校長先生が伊藤先生。白髪の先生でしたが、まあ建林先生が言うんだから入れてもいいなというんで、私は一月五日に結婚したわけですが、トントン拍子に話が進みまして、そしたら私はその頃政経学部で経済原論の助手だったので、経済原論の担当は坂本弥三郎という方でございます。で、坂本先生に「こうこういう訳で、先生助手辞めますから」「辞めんでもよかろうが、何だったらお前講師にしてあげるよ」って。昔はそんなこと出来とったんですかね（笑い）。学長からお墨付き頂いて、シメタと思っているわけで、「決めてしまったのだから仕様がなしでしょう」、で、まあ幸い、来ましたら飯だけは喰える月給くれました。ですからホッとしたわけですが、その内に変なことになります、それは関係ないことで喋りませんけど。

そういうことで、その間研究会というのがあったわけで、堀経夫先生のところですね、大学院に研究科というのがありましてね。私、研究科に行く羽目になったのはリカードとマルサスの論争なんですね。元をたせばマルクスとケインズの論争、つまり対立ですね。だから私は授業でマルクスやケインズばかりやとるんですから、何かうまいこと仲良く出来んものかと、まあ変な言い方ですけど、つまり、うまく結び付くものはないんだろうかと。歴史に必然があるらしいが、その謎を解くにはリカードとマルサスをやらにゃいかんなど。そうすると、私は経済学史という講義にですね、あんな面白くない講義はないとまあ一応受講はしていたんですが、ケネーのところからもう止めた、ケネーのところから講義を聴くのを止めてしまって、だから私は経済学史

の単位は大学での単位はないんです。困ったなあ、この問題解決するためには経済学史を勉強せにゃいかんと。どうしたらいいだろう、こりゃやっぱり受講しなかったけど堀先生の処へ行って指導受けるより他ないなあというんで、のこのこ家を聞きまして堀先生の自宅へお尋ねしまして、まあ心臓だけは強かったらしいですね。そういうことでお尋ねしまして、「先生、私は先生の講義は受けていない、単位も貰うてませんが、リカードも殆ど勉強していませんが、こうこうこういう訳で、是非研究科の生徒として採用してくれないませんか」と、まあこう談じ込んだわけです。これが九月の終わりでございます。つまり卒業論文を出して、これから就職しようかどっちにしようかという時ですね。大阪商科大学の研究科に残るのが一番ええと。研究科に残るといいまして、誰も金くれませんから、金は全部自分で稼いだらいいと、まあこういうんで、ここに一寸職歴の処で出ている筈でございますが、そういう処でアルバイトし乍ら大学院へ行ったわけです。これが私の今日を作った元といったらいいですね。

堀先生は大変人格円満な先生でございまして、何をいってもハア、ハアということで受け入れて下さいまして、ですから受け入れて貰った処が良かったんですよね。「君そんなやったら一応まあ研究生として受け入れましょう」。試験はないんですよ。私は大学院に入る。大学院に相当するものに入るのに、試験なしに入れてやろうと。その代わり研究会があるから研究会に出なさいというわけで、これが堀研究会っていうわけです。で、堀研究会っていうのは堀先生の自宅です。そのメンバーは関西の大学の教授・助教授そういう連中で、ですからまあ勉強の雰囲気はあったわけでしょう。

早速「お前メンバーになったんやから報告せい」というわけで、初めて昭和二十二年十二月十四日、私が研究科の学生の時です。堀研究会で第一回の報告をさして貰った。「ケインズについて」。「お前ケインズやっとならしいからケインズについて報告せい」と。今度は「マルサスを勉強したいというわけで入ったんだから、マルサスについて報告せい」というわけでございます。

その内に私は「ヒックスの限界生産力説について報告して下さい。ヒック

スは面白いですよ。」と、堀先生にヒックスの面白さをですね説教するという変なことですが、これが二十三年八月一日、まだ私が研究科の学生でございます。

で、生活費は、この頃は生野高等学校の教諭をしておりますて、そこで月給を貰っておりますて生活出来とった訳です。英語の教員として、私、資格はなかったんですが、資格なくても結構つとまるもんですね（笑い）。

それから、丁度時期が良かったんでしょうか、最初生野高等女学校の方に英語の先生でいくようになったんです。先輩がおりまして「お前手伝いに来い」「ハイ」ちゅうな事で行きまして、その内に女学校と中学校が合併するってことになったわけですね。合併して生野高校をつくる。合併する時に「お前生野高女から生野中学へ行行って、生野高等学校の教員になれ」と生野高等女学校の偉い先生がそうおっしゃるんです。「そんなことおっしゃっても私教員の資格なんかないんですよ」といったら、「そんなこと心配せんでええ、教員資格なんか貰うたげる」（笑い）、ちゃんとくれた訳ですね。これが大阪府の教員の資格なんです。ちゃんと免許貰ってるんです。試験もなんも受けんとですよ。ひどい時代で。

私がその英語の教員として勉強していたのがジェヴォンズなんです。何故かっていいますと、ジェヴォンズのは *THEORY OF POLITICAL ECONOMY* と言う本ですがね、これが偶々何かのきっかけで手に入ったんですよ。手に入ったら読まないかん。まあこういうわけで、英語の教員だったら原書位読まにゃいかんと。で、ケインズも読まにゃいかんが、ジェヴォンズも面白いらしいよと。私はヒックスの勉強をずっとやりましたし、ヴィクセルも研究しなくちゃいかんというテーマはあったんですけど、まあジェヴォンズが面白いからっていうんで、ジェヴォンズをしかけたわけでございます。まあこういう経過の中で、暫くはジェヴォンズは私の頭の中から離れておりました。

で、広島時代にヒックス、ケインズ、マルクスとやって、そして松山商科大学に來たわけですね。建林先生の代わりにお前来いということですから、数理

経済学を担当せにゃいかんわけです。私、数学一つも知りゃせんですよ。それを数理経済学の研究……「お前数学知らんというけれど、ヒックスの VALUE AND CAPITAL の後の数学註というのが MATHEMATIC NOTE というのがある。これを勉強したんやないか、あれでいいんだ、あれを教え」と。こういう話で「ああそうですか。そうだったら考えましょう」というわけで、自分ではやとったわけですが、それでもヒックスの数学註をいきなりやってもねエ。広島大学では坂本弥三郎先生は学生にヒックスの数学註を教材として経済原論を教えていらっしゃったんですが、松山商科大学ではそれは出来ない。もう一寸やさしいところをとというんで中山伊知郎さんの『経済学一般理論』という本があつて、それで担当したわけです。

その内に学生と接触するようになりますよね。で、学生と接触する時に、まあ僕も生半可な知識を学生の頃から資本論について持っとりましてし、資本論の方はその頃はもうキチンと買っていましたから、学生と話すわけですよ。そうすると、散々学生から批判を受けまして、「先生のマルクス理論は極めて平板である、もう少し立体的に弁証法的にマルクスを勉強せにゃいかん」と叱られてまして（笑い）。で、「そんなもんかなあ」と。今日はおいでになってないかも知れないけれど、あの鉄本作一と言う人、今でも忘れんけど、悪名高い、僕にとってはですね、僕に研究せにゃいかんということを教えてくれた人ですから、恩人みたいな人です。そういう人に教えられてマルクスを勉強し始めたわけですが。

しかし、一番勉強出来たのは此処に書いていますが、学外出向で……大内兵衛の『経済学』、これは面白いなかつたです。はっきり言ってですね。で、社会活動、青年団活動とか労働組合ですね。その頃にソビエトアカデミーの『経済学教科書』というのが出まして、これを講義する人を探しよったんです。で、現在もそういう形で活動なさっていらっしゃる先生方いらっしゃると思いますが、これで否応なしに勉強しなくてはいかんわけでございます。

で、そういう勉強をやっていく内に……私の本業は経済学史でございます

から……、今だからいいですけど、建林先生と言うのは意地悪な先生ですね。立命館大学で数理経済学を担当していらっしやいましてね、「お前もう松山商科大学を動いたらどうぞ」という話がありましてね。「立命館へ来いや」と、「ほうですか、先生言われるんじやったら立命館へ行きましょうか」という気になったことはあるんです。これが昭和三十年頃ですよ。で、一生懸命考えた。しかし、そこまで私、数理経済学は好きじゃなかったわけですよ。数理経済学やるより経済学史やっておった方がいいと。

スミス・マルサスについては堀先生の恩恵を非常に受けておりまして、広島に行った当座にですね、堀先生から最初に与えられた仕事は「お前、国富論の翻訳をせい」、初めから国富論の翻訳を全部しましてですね、とうとう国富論の翻訳を全部しまして、で、それを堀先生に送って、それに朱を入れられて堀先生の名前で春秋社という本屋さんから国富論が出版されて居ります。「入江獎殿 色々ご尽力有り難う」とこう返事が来ましたがね、あの、名前は載っておりません。何処にもですね（笑い）。しかし流石に堀先生だと思っています。「お前のマルサスを愛する気持ちを、（そんなに愛したかどうかわかりませんが）」堀先生はそうおっしゃるんです。「マルサスを愛する気持ちを尊重して、マルサスの翻訳をさせてやろう」と。で、まだ翻訳されていないパンフレットがある、HIGH PRICE OF PROVISIONS という本だ、これを翻訳せい。それが翻訳されて「食料高価論その他」という本になっている訳ですが。

まあそういうことで、兎に角勉強せにゃいかんと。しかし、自分がマルクスをやっとってもいかんし、スミスも読まにゃいかんし、そのうちに、スミスを読むうちにですね、スミスの研究書も読みながら、どうもおかしいなあと。元凶は、スミスの理解のおかしい元凶はマルクスにあるなあと、こう感じ始めた訳であります。で、つまり……もう余り時間がないので端折りますが、あのマルクスがスミスをトコトン批判しているわけですね。全体として。で、そのスミスへのマルクスの批判が、僕には氣にくわんわけです。スミスにはそんな覚えはないと。マルクスによってそんなに批判される覚えはない筈だ。それは、

スミスの読み方が間違いじゃないかというので、スミスの本当の読み方を一生懸命に勉強し始めたわけです。で、この成果が「真実価格論」という論文、長ったらしい論文になって表されて来た訳ですし、今以て未完成の状態ですが、最終的にはスミスの労働体系論という形で、一応、過渡的には纏めておりますけれども、そういうものになったわけです。

何処がおかしいかっていいますと、マルクスはスミスの労働の価値という概念をキチンと読んでいない。間違った捉え方をしているという訳です。

読んでみますと、マルクスだけじゃないんです。リカードウもおかしい。マルサスもおかしい。で、これまでの経済学史の中で、偉い先生と言われている人が全部おかしいと。これは全部ヤツツケないかんということでいったわけですよ。でそれと同じ形で、スミスを批判していた人が、ジェヴォンズであったわけです。

時間があれば、ジェヴォンズと労働体系についてのお話を具体的に申し上げますけれども、労働の価値という概念についてのジェヴォンズの批判ですよ。これがひっくり返した形でマルサスやリカードウ、マルクスのスミス批判につながっているというふうに私は思ったわけであります。つながりがあると。で、その点は引用文を挙げておりますので、あの、是非読んで頂きたい。読んで頂ければ幸いですけれども、そういうことがありますので、私のスミス研究の流れの中で、ジェヴォンズの再評価ということが起きてきたわけであります。もし皆さんのお手許に渡っているものに、私、手許に持っていないんで何処までデータとして出ているか分かりませんが、学会報告ですね。学会報告の欄に、御覧頂きますとジェヴォンズについての学会報告の中に報告を何点かしております。これ、全部同じような流れでのジェヴォンズ研究でございます。それ程にジェヴォンズに傾倒しておったわけですよ。労働価値論に傾倒してるんじゃなくて、ジェヴォンズに傾倒している訳です。

その時にですね、一つだけ、折角の材料でございますんで、一つだけご注目頂きたい箇所があります。四十九頁なんですけど、六番という数字が打ってあり

ます。ジェヴォンズの労働体系の四十九頁・五十頁，そこにアンダーラインを引っ張っています。これは私が昨日引っ張ったんですが。

「労働価値論史は，だから古典派労働価値論の発展史と捉えれば，それを肯定的に否定する歩み，つまり質的發展へ方向への歩みと，それを終局的に否定し去る方向への歩みという二つの方向への流れを含むことになる。」

一寸分かりにくいと思いますが，これが私の工夫したところなのであります。つまり，歴史の流れ，古典派・ジェヴォンズやマルクス，これを何っていますか，「肯定的に否定する」っていうのと，「否定的に否定する」といいいますか，そういう何か変なロジックになるかも分かりませんが，マルクスの受け止め方とジェヴォンズの受け止め方の関連する姿。

で，ポイントは何かといいますと，いきなり難しい言葉を言って申し訳ないんですが，あのマルクスの資本論の中に価値形態論という論理がございます。この価値形態論の問題を巡ってジェヴォンズとマルクスとの関わり方，これがやっぱりあること。それからスミスからジェヴォンズ，スミスからマルクスへの価値形態論問題を巡っての動きがあるというふうに僕は思っているわけでございます。そういうふうなことをですね，実は，こだわりというふうな表現で表しているんです。

「労働価値論史に関するこだわり」。「こだわり」っていうのはそういうことなんで，一番最初にこだわりという言葉は何とはなしに岩林さんに，いうたらそこから始まりますからね。言ってしまった。「こだわり」でええんだろうか，と思って広辞苑で点検しますと，いかにも良くないなあと。これが最初の四行でございまして，広辞苑を引っ張ってみましても「こだわり」というのは使わんじゃなかったなあと。で，むしろ執着というふうに言ったらいいのになあと。執着っていうふうにどうしてしなかったかっていうと，執着はしてないです。執着はしてない（笑い）。

つまり，労働価値論史がどっち向こうがそれは構わない。しかし，問題は，

一つ一つの歴史の段階が次の段階に、どうまともに受け継がれるかっていうことなんで、つまり、そういう歴史の発展の仕方ですね。これだけは我々経済学史を勉強している時に、キチンと捉えなければいけない事柄であると。だから、マルクスのいっていることの真意は何であるのか。これを何とか纏めようと工夫しているのが、この四十九頁のところに書いてあるような、労働価値論史の新しい問題がありはしないか。経済学史の中にそれが拒否されるに至る経緯を加える必要が、ここから生まれて来るのではないかと私は考える。その作業を経由することなしには、結局、肯定的否定の歴史そのものも不明確になるし、経済学の基礎理論としての労働価値論の現段階における把握も、特に、リカードの歪曲の誤りに陥りがちになるのではないか、つまり「原罪はリカードにある」と思っていることになります。

で、スミスからマルクスへの発展の仕方で要になりますのは、「労働の価値」という概念ですね。私はスミスの「労働の価値」という概念には主観的要因はまったく含まれていないと理解しています。ところがマルクスは「労働の価値」というのは労賃のことだと、そういう変な捉え方をする訳であります。何故変であるかということになるわけですが、何故マルクスがそういう変な捉え方をするようになったかという問題もあるわけなんですけど、これは又、別の形で研究されなければならないとして、兎に角、アダム・スミスの「労働の価値不変論」というのがあるんですが、これをですね、マルクスが正確に把握しなかった。そこがトラブルの源であること。つまり労働価値論で価値形態論だけが浮き上がって、そして、「労働の価値」についてのスミスへのこの正しくない捉え方ですね、正しくない捉え方、これをマルクスがしたことがこれがポイントであるというふうに押さえているのが今の私でございます。

ええ、結局何を話した事になるのか分からない事になってしまいましたが、要するに、「労働価値論史に関するこだわり」、ちょうどこの十六枚目の右の方ですね、「ジェヴォンズと労働体系」（「と」がぬけておりますが）、一九六三年九月三十日に執筆した、これでございます。－この頃は原稿出してから印刷物

になるのに時間がかかりますのでね。それで日にちを書くくせがついてきたのでありますがーその日に書き終えたということでございます。

で、「ジェヴォンズが労働価値論を述べているとっているのではない」、これだけは誤解のないようにお持ち帰りいただきたいと思います。私が労働価値論史に関するこだわりを取り扱い、そこでジェヴォンズを扱った。ジェヴォンズは労働価値論を述べたのではなかろうか、そうでは決してないというわけですね。ただ労働体系という言葉はより広義に用いられるべきではなかろうかという、そういう気持ちは強く持っております。実はジェボンズのセオリーの中における労働の扱いのポイントは交換の理論と労働の理論の結合なんですよ。Theory of Exchange と Theory of Labor が結びつけられて、ジェヴォンズの交換比率に関する議論が組み立てられているわけです。わざわざ Theory of Labor を持って来るんですよ。その際に思い出しているのが、スミスの本源的購買貨幣論という言葉であったわけです。ジェヴォンズは幼き妹に対して「私は今スミスを一生懸命読んでいるんよ、ただ、スミスは無味乾燥な人で、数学でやれば簡単に済むのに」、そう妹になげいた手紙を出しているんですが、そのジェヴォンズがですね、スミスの ORIGINAL PURCHASING MONEY という言葉だけはキチンと吸い上げている。これは私が気に入っているところです。つまりジェヴォンズはスミスをその限りでは正しく捉えていた。その中味がどうであるかっていう問題は別個でございます。で、それを議論するっていうのがいわば「労働価値論史に関するこだわり」の本当の中味にならないといけない訳でございます。丁度、今五時三十分ジャストになります。一秒も狂いなしにジャストでございますんで終わらせて頂きます。

最終講義の補足

私の「最終講義」をきいておられない人にー本誌読者の大部分ーにとっては、この「補足」は、無関心なものか、迷惑な物だろう。けれども、三月末退職ということで稿を求められている私にとっては、「労働価値論史に関するこだわ

り」について言い残したことを若干でも補うことに「こだわり」をもつことが、自然な流れなのである。この最終講義に多少とも関心をもたれ、その要旨を希望される方は、学務課に申し出てみて下さい。

労働力を行使すること無しには、人間の如何なる生活も成り立ちません。事柄が享楽に属するものであっても、楽器を操作することでも、運動用具を扱うことでも、否、食器を扱うことでも、筆記用具を用いることでも、全てに関わるのが、この労働力の行使です。

この事実を、如何なる諸連関のなかで認識するかが「労働価値論」の原点だと私は思います。

であるのに、「労働価値論」を認識の原点にすることに、何がしかの躊躇を感じるものが居るとしたら、たとえそのことに何がしかの理由があるとしても、理論的認識の原点を自分で放棄していることになると思います。階級とか社会主義とかは、この原点にかぶさっているものです。

階級的視点は、この原点を生かすために要請されているのであって、その反対ではありません。本源的購買貨幣というスミスの労働認識を是認しながらも労働価値論を拒否したジェヴォンズのこだわりは、「人」を自己の単なる集合と見て、「人」のツツカイ関係を無視した、まさに非倫理的発想に根ざしたものでした。

私たちはこの非倫理的発想からの飛躍を必要としていると思います。まさに「仲間」の構造の中に着眼の出発点を求めるべきではないでしょうか。

司会者 松山大学経済学部の中では、マルクス主義者の代表として私達は見えていたわけですが、今日のお話を聞きますと、そうではどうもない。なかったようで一寸驚きを感じたわけですが、ともあれ、昭和二十六年から今年の三月にかけての四十三年間にわたりまして、松山大学の経済学部、そして、松山大学で教鞭を執られました長年にわたる先生のご指導に感謝しまして、そしてまた、これから先生のご健康と、益々ご研究が発展されますよう祈願致しまして、

花束を贈呈したいと思います。

入江先生は、テニス部の顧問として長くご指導に当たられました。そこでテニス部からも花束が来ておりますし、在学生の代表として現役の大学院生からも来ております。そのほか、生協、参加者の皆さんからも来ておりますのでどうぞ。

花束贈呈……拍手……

司会者 もし先生からなにかありましたら……。

入江教授 こういうときは一言はないんです。あるのは涙だけです。

司会者 どうもありがとうございました。これからもお元気で活躍されることを期待したいと思います。

1994年3月31日、入江先生は5年間の再雇用満了により退職された(70歳)。このとき、経営学部の神森智教授は再雇用満了を待たずに退職した。入江・稲生・神森の3人は、「松山商大の3羽ガラス」と言われていたが、その2人が退職し（なお、稲生先生は翌年退職する）、松山大学の一時代が終わった。

入江先生は退職の辞を『学内報』第207号（1994年3月号）の中で、次のように記している。

「1951年2月から1994年3月までの波瀾の本学での私の生活は、終りに近づいている。

教職員の仲間、諸分野での学生の仲間、思い出は尽きない。既存のサークルの中に入りこんだ仲間づくりとしては新聞学会、新しく組織したものとしては学部・短大での資本論研究会、経研をステップとしたゼミ連など。何れも、まさに学生の仲間としての活動であった。教職員の組織化は、労働組合に飛躍することが、分裂をおそれて、ためらわれた状況のなかで、形だけでもそれに近づけることを意図して、すすめられた。教育職員と事務職員の統一が、とりわけて求められた。

ジュピター会は、そういう状況のなかで組織された。規約など、その資料は、一切、手許にないので、漠とした記憶に頼る他はないが、職員総数50名ならず、うち教員総数30名ならず、学生総数1,000余名、現状からみると超小規模校、それでも問題は山積していた。それに取り組むための若手教員組織がジュピター会であった。

趣味を通じた組織づくりということで出発した。若手年長者が商業英語担当者の山本さんであった。天文に興味をもっていた彼の発案で、木曜日放課後、「3人共同研究室」に集まった面々は、会の名前をジュピター会とした。様々な学内施策案が話題にのぼった。遂に、元木理事の実現に漕ぎつけた。だが、長続きはしなかった。メンバーが次々と職制につく人が生まれ、学園が大規模化したために。

新しい状況の中でジュピター会の生まれ変わりが求められてよいのではないか」¹⁹⁾

入江先生43年1ヶ月の教員生活を閉じた。ゼミ指導生は1952年4月から1994年3月まで学部が42回、総数661名、大学院修士6回、7名、博士2回、2名であった²⁰⁾

入江先生の経済学史の後任は出雲雅志であった。出雲は1956年3月東京都生まれ。東京大学大学院経済学研究科博士課程を出た若手研究者であった。

第三章 退職後の入江先生

1994（平成6）年4月1日、入江先生は名誉教授となった。そして、大学の研究室を払われ、自宅で研究を始めた。それはスミスの「労働体系」論の完成であった。

1995（平成7）年6月の『つくし』第20号において、入江先生は研究の近

19) 『学内報』第207号、1994年3月号。

20) 『つくし』第19号、1994年7月31日、18頁。

況報告をし、「引退してから第一の目標は著書の完成であったのですが、十五カ月経過した今、まだ初めの部分も未完成です。書き直しを重ねています」と記していた¹⁾。

入江先生は研究を続けながら、「つくし会」の継続に尽力され、つくし会の総会を松山にて開き、また卒業生と交流を続けた。その一端を示せば次の通りである。

1996（平成8）年8月17日、つくし会総会が道後の県障害者センター「友輪荘」にて開かれ、和歌山大学教授橋本卓爾（1967年3月卒業、第16回）が「日本の農業と食糧問題」について卓話した²⁾。

1996年12月31日から入江夫妻は橋本博ご夫妻（広島出身、1958年3月卒業、第7回）と正月の京都旅行（嵐山、渡月橋、下鴨神社等）を楽しまれた³⁾。

1997（平成9）年3月16日には、ゼミ生の橋本廸治（1955年3月卒、第4回）さんの呉美術館での「つくし陶芸クラブ」作品展にご夫妻で参加された⁴⁾。

1997年8月17日、つくし会総会が道後の県障害者更生センター「友輪荘」にて開かれ、JTBの吉村哲（1970年3月卒業、第19回）が卓話し、入江先生ご夫妻も出席された⁵⁾。

1997年11月15日には、近畿つくし会総会が新神戸オリエンタルホテルにて久々に開かれ、28名が出席し、入江先生ご夫妻は鎌倉から新幹線で参加された⁶⁾。

しかし、このころ、入江先生は体調を崩された。歩いていてもフラフラして歩けない状態が続いた。日赤など愛媛県内のいくつかの病院に行ったが、原因不明で「様子を見ましょう」とひっぱられ続けた。その結果、病状は悪化し続

1) 入江奨「近況－史的批判の悩み」『つくし』第20号、1995年7月、2頁。

2) 『つくし』第21号、1996年7月。

3) 橋本博「先生は不死身で仙人！ 初春古都へ先生ご夫妻と」『つくし』第22号、1997年7月、6～9頁。

4) 『つくし』第22号、1997年7月、3～5頁。

5) 『つくし』第22号、1997年7月、11頁。

6) 『つくし』第23号、1998年3月。

けた。

そこで、東京で診てもらうために、1998（平成10）年4月から入江先生ご夫妻は鎌倉市西鎌倉3-10-8に転居した。

1998年8月1日、つくし会総会が松山市道後祝谷町の愛媛県地方職員共済組合道後保養所「えひめ」で開かれ、中川病院事務長の中川富士男（1963年3月卒業、第12回）が「今、医療の現場から」について卓話している⁷⁾

1998年11月13日、温山会東京支部総会が東京ステーションホテルにて開かれ、入江先生も出席した⁸⁾ その会合に出席していた入江ゼミの一期生、村木昭雄（1953年3月卒業、第2回）は、そのとき、入江先生は一寸足元が覚束なく、また、話が少し聞き取りにくく、少し心配していたと記している⁹⁾ このころ大分体調にかなり変調をきたしていたようだ。

その後、入江先生の病状は悪化し、東海大学医学部附属病院（伊勢原病院）に入院し、1999（平成11）年に2回にわたり手術を受けた。その結果、一命はとりとめたものの、声も出ず、全身麻痺、意識障害も出ていた。奇蹟でも起きない限り、普通の生活は不可能と思われるほどだった¹⁰⁾

その頃、1999年4月頃、文部省から松山大学に照会があり、次の受勲期には松山大学から出すことになっているとして、理事会は候補を入江先生に絞り、総務の奥村課長が準備し、申請の労をとった¹¹⁾

入江先生が入院中の、1999年8月28日、つくし会例会が松山市道後祝谷町の愛媛県地方職員共済組合道後保養所「えひめ」で開かれている¹²⁾

また、入院中の1999年の秋、入江先生は勲三等瑞宝章を受章された。主治医の富永博士が大変喜んでくれた、という¹³⁾

7) 『つくし』第23号、1998年3月、11頁。

8) 『温山会報』第41号、1999年。

9) 村木昭雄「素晴らしい気力」『つくし』第25号、2000年7月、7頁。

10) 入江多恵子「奇跡を願い、命をかけた再生への日々」『つくし』第27号、2003年10月、1頁。

11) 『つくし』第25号、2000年7月。

12) 『つくし』第24号、1999年6月。

1999年11月に比嘉清松学長が、入江先生の勲三等受章のお祝いをするために、東海大学病院を訪問したが、予想外の重症でお祝い申し上げられず、辞去している¹⁴⁾

その後、入江先生は、2000（平成12）年3月末にリハビリのため大磯病院に転院した。寝台車に医師を付けての転院であった。そこで、6ヶ月にわたり持ち前の几帳面さでリハビリを行なった¹⁵⁾

2000年7月『つくし』第25号は、入江先生の快方を願い、ゼミ生からの激励の特集号をくんでいる。そこに、リハビリ中に入江先生は「つくしの皆さんへ」という文書（6月24日）を寄せている。その大要は次のようであった。

「病に倒れて以来の刻一刻の推移は夢の中で、多少正気に返ったときは、記録を手がかりとした家内の報告で、つくしのメンバーに衷心より御礼申しあげます。

この度の勲三等瑞宝章のことについて一言。それほどの価値が僕の仕事にあったのかは疑問であるが、この面倒な仕事に関わってくれた総務課長の奥村さんに深甚の謝意を表明させて頂く。

病院での日課は、消灯は9時、朝食8時、リハビリ開始9時～10時半、13時～15時。水曜日は入浴。

リハビリ用具はバネを左右使用、各々500回（自己規制）。棒に石を付けた用具で上下二様、計1000回（自己規制）」¹⁶⁾

奇跡を願い、また、リハビリの成果で、入江先生は2000年の秋には在宅できるまでに回復した。しかし、松山にはとても帰れる状態ではないので、奥様

13) 『つくし』第25号、2000年7月、4頁。

14) 松山大学学長比嘉清松「入江先生のご受章を祝う」『つくし』第25号、2000年7月、2～3頁。

15) 原三世志「大磯からの最新情報」『つくし』第25号、2000年7月。

16) 入江奨「つくしの皆さんへ」第25号、2000年7月、4～5頁。

は横浜市都筑区中川の新たなマンションに入居された。そこは横浜で一番新しい街で住民の平均年齢が38歳という若い街であった、という¹⁷⁾

2002（平成14）年8月の『つくし』第26号に入江先生は「続・つくしの皆さんへ」を寄稿している。そこで、自身のことよりもゼミの卒業生のことを心配している¹⁸⁾

2002年12月15日、私（川東）は横浜の入江先生宅を訪問し、見舞った。駅前の喫茶店で入江ご夫妻と食事した。先生は手が不自由であったが、食事ができるまでに回復し、会話は通常であった。入江先生の驚異的な努力、執念、生命力のたまものであった。そこで、先生は「後10年は生きたい、そうでないと仕事が片づけられない」と述べられた。

2003（平成15）年10月8日、大分回復された入江先生は一時帰松し、学校にこられた。雑誌の処理のためであった。夜、友輪荘に泊まれ、比嘉先生と私は入江先生を訪問、見舞った。

2004（平成16）年3月と5月に、ゼミ生の金子博美（1976年3月卒、第25回）が横浜の入江先生宅を見舞っている¹⁹⁾

2004年9月19日、私は一時帰松していた入江先生宅を訪問し、空港近くのレストラン・樹庭にて一緒に食事し、飛行場に送った。これが入江先生との面会の最後であった。

2004年の年末年始、入江先生ご夫妻は六本木で過ごされ、2005（平成17）年1月30日に入江先生は検査入院をされた。しかし、不慮の事故もあり、突然のことであったが、2005年4月12日、逝去された²⁰⁾ 享年81歳。

2005年8月、入江先生の奥様は、鴨川の自宅を整理し、入江先生の蔵書を

17) 入江多恵子「奇跡を願い、命をかけた再生への日々」『つくし』第27号、2003年10月、2頁。

18) 「続・つくしの皆さんへ」『つくし』第26号、2002年8月、2～3頁。

19) 金子博美（「感激の再会 in 横浜」『つくし』第28号、2004年10月、18頁。

20) 入江多恵子「何人も永遠には生きていられないのですから」『つくし』第29号、2006年1月、3頁。

松山大学に寄贈したいと希望され、私もお手伝いをし、2005年12月、「入江文庫」を創設することが図書館および理事会で承認された。また、入江先生宅の整理の際、私は入江先生の椅子を頂いた。この椅子は名誉教授室に置き、今、私が使わせて頂いている。

2006年1月の『つくし』第29号は「入江奨先生 追悼号」を組んだ。非常に多くのゼミ生が心からの追悼の辞や思い出を寄せた。また、入江先生を敬慕する望月清人名誉教授が「訃報に接して」の一文を寄せ、「入江先生は、大学の中でも一番特異な存在でした。まじめすぎるほどの誠実さと、自説を曲げない頑固さとは教員生活を始めた頃の私にとっては、まばゆい程の存在でした。多くの教職員にとっても、先生は最も信頼できる師でした」と記している²¹⁾まさにその通りであった。

また、2013年、入江先生の奥様は、入江がお世話になった松山大学に寄附を願い出られ、私もお手伝いをし、経済学部は「入江奨先生奨学金制度」を創設し、応えた。また、奥様は、さらに2019年にも寄附された。

入江先生は、死後も松山大学の学生のために役立ち、また私の中に生きている。

お わ り に

入江奨先生の「人と学問について」まとめておこう。

第1に。入江先生は極めて真摯な、真面目な研究・教育者であったことである。

この点は衆目の一致するところである。

第2に。入江先生は1年生の教養科目・一般教育科目や経済学部の基礎教育科目において、一貫してマルクス経済学を教育した。入江先生＝マルクス経済学、マルクス経済学＝入江先生というのは学内で定着していた、といえる。

第3に。入江先生の経済学史の講義は、マルクス学派におさまらない。重商主

21) 望月清人「訃報に接して」『つくし』第29号、2006年1月、3頁。

義、重農主義、古典学派、マルクス学派、ケインズ経済学、限界効用学派と、幅広く講義していることである。

第4に。入江先生の経済学史研究は幅広いことである。入江先生が取り上げた経済学者は、トーマス・マン、ジェイムズ・スチュアート・ミル、アダム・スミス、リカードウ、マルサス、ジョン・スチュアート・ミル、マルクス、ジェボンズ、ケインズ、ハロッド、ヒックス、ジョン・レイ、ミーク等々、数多ある。しかし、中心はアダム・スミスとマルサスの研究であった。

第5に。入江先生の経済学史研究の方法は、堀経夫博士から受け継いだ「原典主義」「内在主義」ある。そして、その方法をさらに進化させた。それはある歴史段階でまとまりをもち、矛盾・混乱のない学説体系が、歴史の展開＝階級対立のなかで相対立する学説を生み出し、更に高次の理論体系を生み出すという観点であった。

それにもとづき、入江先生はスミスの「古典派経済学」について、「矛盾、混乱の体系」という通説に対し異説を述べた。入江先生の主張（神髄）を再度引用すると次の通りであった。

「積年の課題は古典学派の体系を統一の体系と見るのではなく、内部的に矛盾の発生因を含んだものと見る視点、つまり、ある段階で一つのまとまりをもっていた学説体系が、歴史の展開のなかで、相対立する体系群を生み、そのなかから、更に高次の統一の理論体系に転化し、階級的な対立を反映して、反権力の体系と権力の体系に分化していく新しい近代が展開されるという観点は歴史を有意味にとらえるうえで追求する意味があるのではないか。通説では矛盾、混乱の体系と言われているスミスの体系を、古典学派の創始者スミスの『国富論』体系が、それ自体としては矛盾、混乱を含まない、一つのまとまりをもっていた学説体系だと見る観点でとらえなおす作業が、私の積年の課題である」

そして、この視点からマルクスのスミス解釈をも批判する異端の学者であった。しかし、入江先生のスミス理解・通説批判は完成されなかった。したがって、入江先生の異説は学界では今のところ支持はまだ少ないようである。

第6に。ゼミ指導について、極めて熱心であった。本ゼミの他、サブゼミも行った。そして、ゼミ生を多くのゼミ大会に参加させるべく指導した。

第7に。自分のゼミのみならず、松山商科大学の学生の自主的な研究活動をこのほか奨励した。赴任早々、経済学研究会を指導し、また、資本論研究会を組織した。新聞学会も指導した。さらにゼミ連が結成されると、その指導を退職間際までされた。それにより、入江先生から影響を受けた学生は数多い。また、研究者の道に進む人も少なからず出た。

第8に。学内行政では、学部長を4年間、研究科長を6年間続けられ、学部の充実、大学院の創立・完成に多大の貢献をされた。経済学部と言えば入江先生、入江先生と言えば経済学部であり、経済学部のシンボリック存在であった。

第9に。入江先生の同窓会「つくし会」についてである。これほどの結束力・団結力のある同窓会は松山大学のなかにはないであろう。いかに、入江先生がゼミ生に対し、親身になって指導したか、そして慕われたかが窺われよう。入江先生を超える教員は今のところみられない。

（完）